令和４年度　第３回静岡北特別支援学校　学校運営協議会　報告

本校は、より機能的で効果的な学校運営協議会の構築を目指し、隣接校の中央特別支援学校と連携、協同し、第３回運営協議会を合同で行うこととした。
以下に第３回運営会協議会の報告を記す。

「センターハウス」

１　日　　時　　令和４年 11 月９日(水)午前９時 30 分～11 時 30 分

２　会　　場　　あさはた緑地広場　センターハウス

３　参 加 者

(1) 学校運営協議会委員［本校］
【委員①】常葉大学教育学部　講師
【委員②】協同組合　静岡流通センター　専務理事
【委員③】ましろ総合法律事務所　代表弁護士
【委員④】麻機学区自治会連合会　防災委員長
【委員⑤】静岡市障害者協会　静岡市障害者相談支援推進センター　事務局長
【委員⑥】静岡北特別支援学校ＰＴＡ会長
＊欠席　静岡市都市局都市計画部　緑地政策課長

(2) 学校運営協議会委員［中央特別支援学校］
【委員⑦】静岡市　あさはた緑地交流広場　指定管理者　管理事務所長
【委員⑧】社会福祉法人つばさ静岡　療育部長
【委員⑨】静岡県立こども病院　外来・医療連携部　調整師長
【委員⑩】スターバックス コーヒー 静岡呉服町通り店 ストアマネージャー
【委員⑪】中央特別支援学校ＰＴＡ会長
＊欠席　静岡大学教育学部　准教授

(3) 教職員［本校］
・校長　・副校長　・事務長　・部主事（小・中・高）

(4) 教職員［中央特別支援学校］
・校長　・副校長　・部主事（小・中・高）　・寄宿舎チーフ　・教務課長
・地域支援連携課長

４　会議次第

(1) 両校校長挨拶
(2) 両校運営協議会委員紹介
(3) あさはた緑地の紹介・説明
(4)「地域との連携」ねらい・取組紹介
(5) 意見交換会

５　会議内容要旨

(1) 両校校長挨拶

ア　中央特別支援学校長

本年度は、「伝え合う　つながり合う　分かち合う」をスローガンとして掲げ、保護者や地域、関係機関とつながり合うとともに、児童生徒の在学中から卒業後までの時間的なつながりも意識して教育活動を行っている。教育活動を校内で完結するのではなく、様々なヒト、モノ、コトとつながりながら展開することで、経験を広げ、児童生徒たちがもつ可能性を最大限に引き出していきたいと考えている。そして、卒業後の一人一人の豊かな生活につなげていくことを願っている。

地域とのつながりが地域の人々の心の豊かさを醸成し、誰もが暮らしやすい共生社会の実現に向けた足がかりになってほしいと願っている。

イ　静岡北特別支援学校長

「学校運営協議会」の共同開催はとても素敵な取組だと思う。両校にはたくさんの共通点があるが、お互いの学校運営について知り合う機会が少ないので、この会をより知り合う絶好の機会にしたい。

本校の自慢は、麻機地区の自然や環境そのものを素材にして、全校が子供主体で取組を続けている「麻活」という学習活動。麻機の地域や自然を教室にして、子供たちの豊かな学びを展開していきたいと考えている。本日は、この麻活について皆様に知っていただくとともに、この地域とそれぞれの学校の未来に向けたよりよい在り方について、御意見、御示唆をいただきたい。

⑵　あさはた緑地の紹介・説明【委員⑦】

・あさはた緑地のコンセプトは、「未来につながる緑のあそび場」である。２年目となり、木道や畑なども整備され利用者の幅も広がってきた。これが完成ではなく、次世代に向けた持続可能な運営や利用者のニーズによって変化する公園を目指している。
・「緑のあそびば」は、遊具だけでなく園内の豊かな自然そのものを楽しめる場所にしたり、学校、福祉にとって使いやすく、コミュニケーションを通して未来に向かって活用したりする場にしたいと考えている。
・遊水地は水を貯める役割も担っており、９月の台風 15 号の際も多くの水を蓄えた。
・公園全体がバリアフリー対応となっており、インクルーシブ遊具やバリアフリートイレ、車いす対応の東屋等の工夫がされている。
・今年度は、あさはた緑地職員が中央特支に出向き、教員がどのような配慮をして子供たちの対応をしているのか見たり、逆に、教員の研修の場（社会貢献研修）として受け入れたりできた。
・中央特支との連携では、校外学習の受入れや畑の活用、シトラスリボンプロジェクトの協力等を行っている。静岡北特支とは、動植物の観察授業、清掃活動等で連携が行われている。今後も、中央特支、静岡北特支との連携を深めていきたい。

⑶　「地域との連携」取組紹介

ア　中央特別支援学校

①地域とつながり合う授業実践シートの紹介

地域から学校への資源の提供だけでなく、地域にとって本校と関わることでどのような価値があるのか、教員が考えるためのシートを作成し、教員間で共有している。

②学校だよりの発行

麻機自治会の皆様や関係機関に年５回発行する予定である。学校が発信したいことを新聞の取材のイメージで、タイムリーに分かりやすく伝えることをめざしている。

③きらめく個性の作品展の紹介

地域を会場として本校児童生徒の作品を展示してもらう取組である。今年度で 18 回目で、スターバックス６店舗や地下道ギャラリー、ベイドリーム清水、アピタ静岡店に協力いただいている。

イ　静岡北特別支援学校

本校では「麻機で生活する 私たちの 私たちによる 私たちの活動」のことを「麻活」と呼んでいる。「麻機遊水地はぼくらの宝物」と卒業生が言っていて、麻機が児童生徒の心を育ててくれる大切な場所になっていることが分かる。

麻活が始まり９年目になるが、児童生徒の生涯学習の基盤や地域づくりに積極的に参画する姿勢を育むことができる活動なので、更なる地域との協働した実践を充実させていきたい。

＊高等部 作業学習「遊水地再生事業班」の生徒が、遊水地の桟橋（遊歩道）周辺の草刈り作業について報告

⑷ 意見交換（グループワーク） ＜●は、連携の更なる充実に向けての意見等＞

【Ａグループ】

・両校ともに、地域での作品展や、地域での作業学習・作業販売等、地域と上手につながっている。
・中央特支は、地域との『つながり合い』という言葉からも、地域と学校の双方向性のある取組を視野に入れ、両者の想いをかなえる活動ができている。
・静岡北特支は、『麻活』というテーマを掲げ、継続した取組になっていること、児童生徒が主体的に参加していること、小・中・高と段階的な押さえがあることがよい。
・地域とつながり合うことで、生きる力を高めたり、地域について新たな発見ができたりする。将来の生活につながる点がよい。
・近隣地域（あさはた緑地や流通センター等）に子供たちの取組を発信する場や機会が設けられており、生かすことができている。
●今回の学校運営協議会でもこのように視点が増えるのだから、さらに広く発信することで、第三者からの新たな視点で、つながり合うための提案を期待できる。
●静岡北特支と中央特支とのつながり合い（連携）をもっと深める学習を計画できると両校の勢いが増す。例えば、カレンダー等のコラボグッズ製作はどうか。（すでに、第三工区の定点観測やビニールエプロン作り等のコラボは始まっている。）
●学校としては、地域の方が学校とつながる価値を、地域としては、学校から地域の運営に関する意見・要望を知りたい。
●地域とつながり合うことは、互いのニーズがマッチすることでもある。互いのニーズを積極的に発信し合うことで、さらに互いの考えに寄り添うことができていく。
●将来の就労につながる取組もよい。
●学校の取組を地域の方にさらによく知ってもらうために、発信・アピールの仕方を工夫する必要がある。

＜つながり合う取組（案）＞

・あさはた緑地マーケットでの出品
・農福連携×オーガニック給食
・作業製品開発（レンコンチップス等）
・学校（児童生徒）による地域でのプレゼンテーション
・あさはたの生き物・植物の紹介
・番町市民活動センター他、地域の掲示板を広く活用
・センターハウスでの販売等（作業製品販売会を地域の方がアクセスしやすい場所・時間で実施する。）

【Ｂグループ】

・この地域は、教材が豊富で環境に恵まれている。学校は児童生徒の生活の場であり、このような地域の中で本物の生活すること自体に価値がある。
・静岡北特支は、地域との関わりについて段階的にテーマを設定している。将来の生活を踏まえて考えられている。
・作品展やシトラスリボンの取組等、学校と地域の施設という二者の関係から、地域の方々へと関わりが広がっている。麻活や作品展などは、児童生徒の頑張りをみんなに評価して

もらえるとても良い機会になっている。評価される機会をもっと増やしていきたい。さらにそれを「はたらく」というところにつなげていきたい。
●センターハウスを活用するなど、この環境をさらに利用していきたい。
●両校がそれぞれ地域とつながり合う実践を行っているが、お互いのことを良く知らない。両校がつながり合うことで、活動の幅が広げたり、お互いの実践を参考にしたりできるのではないか。また、実践を発信できる場も作れると思う。防災やPTA活動についてもつながりをもって進められると良い。
●学校の実践を「発信」「アピール」する方法について、工夫する必要がある。児童生徒の頑張りを多くの人に知ってもらえると良い。静岡北特支の「あさちゅー」を参考に、中央の「あさバード」の活用方法も考えていきたい。

【Ｃグループ】
・どちらの学校も本当に地域の方とよくつながっている。
・作品展を街中で行うことで、より多くの人が逆にあさはたへ来てもらうことにつながる。
・麻活は、地域とつながる素晴らしい取組である。麻活キャラクターが親しみをもてる。
・静岡北特支と中央特支の取組は素晴らしいので、もっと大きな場所で発表したり、インターネットで発信したりした方が良い。
●地域の方々に知ってもらうために、学校に来てもらう機会を増やす。
●両校の取組を共有できる場を作れたら、もっと発信できることも増えるのではないか。
●麻活ブランド商品の開発や「あさちゅー」の絵本などを作ってみたらどうか。
●児童生徒の作品・製品に対する思いを地域の方に発表する場があるとよい。
●防災に関する不安が大きいので、より多くの面での連携が必要である。

【Ｄグループ】
・外に出ていくことが大事で地域を知ることができる。センターハウスのおかげで地域に出やすくなった。
・作品が展示されることで外出する機会になる。作品展を毎年楽しみにしている方（子ども保護者、地域の方々）がいる。
・生徒自身がどのような力が身に付いたか実感している。地域からのリアクションが子ども達の自信につながっている。
・環境のため、地域のため等、生徒の視野が広がる。地域のために自分たちができることは何かと考えることができる。
・「麻機が好き。」「地域が好き。」という思いは、共生につながる。
・静岡北特支の実践は、小→中→高つながっていて切れ目のない教育となっている。
・中央特支の授業設定シートは、活動を授業としてしっかりとおさえ、全校で共有されている。
●「活動の広がり」
＜両校で取り組める活動＞
・静岡北特支の生徒が中央特支のために活動する。（逆も有り）
・互いに行き来し、互いの活動を知る機会を設ける。（分かち合う）
・取組を地域の方々に知っていただくために活動する。
●「情報発信の工夫」
＜作品展についてのリアクション＞
・地域の方々からのリアクションを児童生徒や保護者は知りたいと思う。掲示してあるだけでは目に入らない。
＜流通センターでの販売会＞
・中央特支の生徒も参加できるのではないか。

＜コクーの活用＞
・ホームページを見てほしい場合には、コクーを使って「ホームページに掲載されていることをアナウンスして、ホームページのURLを貼ることで見る人が増えるのではないか。
＜学校だよりの見やすさ＞
・内容まで読んでいない。載せたい情報がたくさんあるのは分かるが、字が多いと読まない。写真やイラスト等をうまく使って目を引くようにしたり、字を大きくしたり、目を引く見出しを付ける等の工夫がもっと必要なのではないか。
●「防災の視点」
・児童生徒在校時に発災した場合、どのような連携・協力ができるのか確認をしたい。
●「安全の視点」
・活動の際には児童生徒の安全管理を徹底したい。（交通量は？安全な場所か？等）